

ゴダヤ系英國人

毒をすすめる

特 249

384

金!

金!

金!!

×
Y
Z
著

10 セン

昭和書房



仲木貞一著

支那を毒する
ユダヤ系英國人



東京朝野新聞出版部
昭和書房版



目次

戦争と金(序).....	(一)
英國政府とユダヤ人.....	(三)
英國とユダヤ人の因果關係.....	(六)
日支事變と英米.....	(一〇)
英國ジウと米國ジウの相剋.....	(一五)
米國の輿論を動かす英國ジウ.....	(一六)
支那に躍る英國系ユダヤ人.....	(二〇)
日本は何故商賣に失敗するか.....	(二三)
事變のドサクサに國英のボロ儲け.....	(二九)



支那を毒する

ユダヤ系英國人

仲 木 貞 一

戦争と金

戦争は一にも二にも三にも金と云つたナポレオンは最後のウオーターローの戦争で、待ちに待つた金が來なかつた爲に、飢えたる兵馬と不足の彈丸とでは、張り切つたるウエリントンの軍勢に敵しやうもなく、惨めなる戦敗を喫してしまつた。

ナポレオンが首を長くして待つてゐた金と云ふのは英國猶太人ロスチャイルド一家からナポレオンに貸出す約束になつてゐたのだ。所がロスチャイルド一家では、英國政府の莫大な利権を附

しての頼みに寝返りを打つて、ドバー海峡に迄持出した黄金を英國に持歸つてしまつた。

この功勞に依りロスチャイルド一家は、英國政府から貴族待遇を受ける事となり、英國の財政の權利と政治上の權利とを掌握する事となつた。英國殖民地に於ける商權は勿論の事、國內に於ける商業は素より主なる製造工業は、皆ロスチャイルド一家に依つて經營されてゐると云つても過言で無い事となつた。又アームストロング、ヴィツカース等の軍需品工場は殆んど皆この一家の手になるのである。

更に近時には支那への投資も可なりあるやうだ。北支に二億萬圓中支に十億萬圓以上投資されてゐる英國の總資本の大部分はロスチャイルド一家からではないかと思はれる。兎に角英國一の富の所有者である計りでなく、世界一の金持ちと云はれる事になつた。金權あれば政權の生れるは當然の事、ロスチャイルド一家が英國の政治を左右してゐると云はれるのはその譯である。

英國政府とユダヤ人

さて、此處に英國政府と猶太人問題とに觸れておく必要がある。彼の有名なスペインのアルマダ艦隊即ち當時の世界の海上權を握つてゐた世界一の大艦隊は、十六世紀の中葉に英國の艦隊に大西洋上で撃滅されてしまつた。今迄の世界海上權が英國の手に移ると同時に世界の航海權即ち商權は全部英國に移り、世界に日の没する事なき世界中の領土と大なる富とを生む基礎はこの海戰の大勝利にあつた。而して、この海戰の費用は何處から出たか？當時まだ國內統一さへ満足に出来なかつた歐洲で最も文化の遅れてゐた海賊に近い英國には、當時の大西洋を荒し廻つてゐた海賊の荒くれ者共を多額の金で雇入れる要用等は絶対に無かつた。寧ろ英國は一番歐洲で貧乏な國であつた。

その貧乏な英國が如何にして莫大な戰費を手に入れたか？ナポレオンを討つ時に猶太人の金を利用したと同様、この時も亦猶太人の金を借用したのである。その時の猶太人は、從來スペイン政府に用立てゝゐた所の猶太人である。その猶太人がスペイン政府から虚遇を受けた。そして遺恨に思つて敵方英國に融通をして、スペインを敗かしたといふ事になるのである。

當時否その以前からヨーロッパの國王貴族は皆猶太人から金を借りてその國を富ませ武力を作

り文化を築いて行つたものである。即ち猶太人に依つてヨーロッパ各國は強大となり、同時に各種の文明は作り上げられたと云ふ事が出来るのである。而して、各國の爲に十分御奉公をした猶太人はどうなつたかと云ふと、國が強大となつて、金力の必要まで必要と認めなくなつた時にはこれを虐待放逐するのである。最近ナチスが追つたのは政治的意味合ひになつてゐるが、然しその裏面には大戦當時の莫大な借財問題が根底を爲すものではないか？ 所で、英國の英邁なエリザベス女王は猶太人を巧みに利用して大英國を築いてしまつたが、そのあとで猶太人を何う始末してしまつたかと云ふと、實はこれを皆焼殺してしまつたのである。

理由は斯うである。侍醫の一猶太人がエリザベス女王を毒殺せんとしたと云ふので、その侍醫を殺すと同時に、或種の使喚を受けたロンドン市民は、我國の愛敬する女王に毒を盛るやうな猶太人はやつつけてしまへと云ふので、忽ちロンドン中の猶太人は火あぶりにされたのである。宛もこれは震災當時の〇〇殺しのやうな有様であつたらうと想像される。

劇は世界の生ける鏡と云つてシェークスピアは、當時官廷お抱への狂言書きであつたが、彼の傑作の一つの『ヴェニスの商人』(明治時代に譯して『人肉質入裁判』と云つたもの)には、いと

も鮮かに猶太人は憎む可しと云つた事を、人民煽動の爲にお上の命令で書いたのではないかと思はれるやうに、シャロイックと云ふ金利業者の猶太人の事が深酷に描けてゐる。

然し流石に世界一の劇作者だから彼は決して此シャイロツクと云ふ猶太人を、マーローと云ふ同時代の他の作者のやうに鬼畜のやうに描いてゐなかつた。頗る同情して、一面立派な悲劇の主人公として描き出してゐる所に頗る面白味がある。故に英國ではシャイロツクを大悪人として演じ、獨逸では同情さる可き人物として演出すると云ふ二種の演出法が今日出来てゐるところが面白い事だ。

人情の裏表をよく知つてゐるシエクスピアは、流石にロンドン子と一緒になつて猶太人狩り等しなかつたやうだ。お上の命令で仕方なく政治的演劇を書いても、猶太人の普通の人間に描いた所に面白味がある。實際猶太人は高利を貸して非道い事をするけれども、貸すには貸すだけの理由、取立を嚴重にするにはするだけの利用が立派にある譯だ。

英國とユダヤ人の因果關係

さて、猶太人はこの通りに、何處の國家にも非道い目に逢はされる、利用計りされる。全く様
の下の力持ちの形だ。考へて見れば可哀想な話だから、これに對する復讐怨恨と云ふ考が相當
に強い事は當然である。彼のナポレオンの様に三百年前の同族の虐殺に對する怨みを暗さんとし
た事は當然である。だから、敵國佛蘭西側に金を融通しやうとしたのは當然である。だが、こ
時これを見事に喰ひ止めて、昔の怨みはすっかり棄てさせてナポレオンに見事鼻を明かせ大英
帝國を磐石の泰きに置かしめた當時は大政治家は實に偉い腕前であつたと云へる。然し、それと
同時に、今度は火あぶりに遭ふやうなへまをせず、確實に大英帝國の有ゆる利権を振りしめて、
ちり／＼と政治實権を固めて來たロスチャイルド一家のやり方も亦素晴らしいものと云へやう
彼のエドワード七世陛下が、シンブソン夫人と手に手をとつて他國落ちするに至つた原因も亦實
に猶太人問題にあると云へやう。

今世界での最も進んだ思想家である社會主義者で大文學者であるアプトン・シンクレーは、シンブソン夫人の叔父に當る。彼女が米國にゐた娘時代にはこの叔父さんの思想の感化を相當受けたらうと思はれる。彼女が英皇帝の知遇を忝うして間もなく、英皇帝は議會に貧民救助に關する一法律案を提出されんとした。此は英國憲法に於て許されざる所の物であるが、それにも拘はらず其を打ち破らうとした所に面白味がある。

勿論これはシンブソン夫人の入智慧が原動力であつたらうと十分に想像される。と云ふのは、英國は今一番古い社會制度經濟組織に縛られてゐて、貧富の懸隔實に著るしいのであるが、その貧民側を救はうとする皇帝の思召しは、當然シンブソン夫人の良い意味の使喚に出た物と解釋してよからう。然し乍ら法案は、本來の英國民自體には仕合せになる事だが、資本家階級富豪即ち猶太人系にとりては大なる問題である。

エリザベス女王が火あぶりを行つたのとは甚だ形式が違ふけれども、猶太人排斥である事には相違ないのである。ナポレオンの時から數百十年経つて、猶太人は英國から追はれんとするのである。猶太人たるものヤツキとなるのは當然である。間に挟まつたボルドウィン首相の困惑は目

に見えるやうだ。

かくて王族に非る女性は、英皇室には嫁せられないと云ふ憲法が口を利いて、皇帝の退位皇帝の英國民一同に對する悲痛なるラヂオでのお暇乞ひ、聽て英國貧民一同の涙ながらのお見送りを受けさせられて他郷へと安住の地を求めて立去り給ふた。だが問題は、今回の日支戦争にと戻るのである。

米國の先大統領秘書ハウス大佐は世界の富の公平なる分配と云ふ本を書いた。英國のやうな一萬方哩に一人しか人のゐないやうな領地を全世界中到處に持つてゐる國は又天然資源の有餘る國は、日本や獨逸や伊太利のやうに國土狭く人口増加物凄く然も天資の薄い國々に、公平に當るを分配す可きである。然る時には、戦争は地球から影をひそめるだらうと云ふ各論なのである。

米國の輿論は眞にこれを承認賛成をした、英國の上院に於て、又下院に於てこの問題は屢々政府への質問戰となつた。然しイーデン外相其他現政府首脳部は、斯かる議論に耳を傾ける意志は毛頭無い。英國の持つ富と大領土とは、長年間の同國民多大の努力に依つて獲得したもので、此を易々と他國に譲つて堪るものか、それ所か、最近日本が世界の市場を荒し廻つて英國の利益を

損するから、先づこれの取締を考ふ可きだと云つた。これに對して下院の或領袖株の一議員は、それは人道上良くない事だと一矢を報じたやうであつた。

現在の英國政府は、イーデン外相その他の言辭でも分るやうに富の公平なる分配等は思ひもよらず、貿易事業に斷然優位を占めて、英國の利益を荒すに至つた日本は懲らしめねばならんと云ふのである。所で、その貿易とは全世界を通じての事ではあるが、主として夫は支那を指すものである。英國は支那に對して鐵道の借款計りではない。綿糸ばかりではない、この頃では蔣介石の軍備擴張に伴ふ武器の賣込みに忙しいのである。軍需工場もみな英國の投資によつて作られたのだ。

而るに日本の絹糸に對抗して人絹に力瘤を入れたが、到底絹糸に敵はぬ事を知つて彼は揚子江沿岸に桑の木を植た、製糸工場を建て出した。中北に於ける投資十億圓以上と云ふのは此等の事を指すのである。而して、これは英國政府がやつてゐる事でなく、資本家達即ちロスチャイルド一家の仕事である。此處に於てか、猶太人ロスチャイルドと日本とは正面衝突の危機を孕むに至つた。

日支事變と英。米

北支問題、上海事變が勃發するや英國はやつきとなつて中立地帯を稱へたり、日本の不法を叫んだり、日本軍撤退を申入れたり、其他各方面から各様の惡意ある日本への援助を露骨に示し出した。それも然うであらう、毎日朝に晩にボカ／＼爆破されて行く軍需品製作工場は英國の物、即ちロスチャイルド一派の物だから、氣が氣でない筈だ。

其處で考へる可き事は、彼の前英皇帝が、シンブソンの意見通りに英國の社會制度を變改し、庶政一新をもつて資本家即ちロスチャイルド一家を抑制したならば、公平なる富の分配はしないまでも、日本の貿易を邪魔したり、支那で角突合ひをしたり、日本の當然の繩張り内に出しや張つて來て利益の獨り占めをしやうと、たくらむ事は無からうと思ふ事である。前英皇帝の退位された事は、返す返すも残念至極であるし、又世界平和の上からも惜しむべき事柄である。

却説、此所に乘る神あれば助ける神ありと云ふ可きか、彼の富の公平分配を説くハウス大佐を

生んだ米國、英國の夫と反比例して、最近非常に我國に對して好意を寄せてゐる事である。所がついこの間迄は、彼の永い間日本國民を苦しめた排日問題に引續き、凡てに我を敵視して、今にも日米海戦が始まるやうに、凡ゆる形勢が逼迫してゐたのに、急に手の裏を返すやうに最近好意を示し出した事である。

昨日迄の敵が、俄に味方になつた感じがあるので、一般國民は新聞を讀んでゐても、何が何だかさつぱり分らず狐につまゝれた形だと思ふ。だが、米國が日本に好意を持ち出した事に、決して噓偽りはない。その證據は、今後に續々現れて來るだらうと思はれる。所が毎日の新聞に現はれる支那飛行隊のノースロップ號、カーテクス號、ボーウイング號等の優秀機は、何れも皆米國から輸入された物、最近に又數十臺の米機が支那に向ひ輸出されたとの報もある、所が一方には又米國飛行家の渡支從軍を米政府は嚴禁したと傳へられる。

これ亦頗る可笑しい矛盾した事のやうであるがこれ亦皆事實である。米國の軍需品製作會議は何所の國へ何を賣つてもいいことになつてゐる事は、何所とも遠はぬ所、我國からも全國に可なり武器は出てゐるのだから、此をもつて彼の國が我國に惡意を持つものだとは斷言出來ない。

凡て商業は國際的、非國家主義、個人主義に立脚してゐるのが特長であつて、それが國家的見地から改めらる可きだと云ふのは、極く最近の思想である。實は各國共にこの問題に悩んでゐるのである。今回の日支戰役を契機として、この大問題は、當然解決さる可きであらう。

さて、米國が我國に好意を持つ事は、何をもつてその證據とするかと云ふ問題となる、それはこの國の猶太人で、或は世界一の富を所有してゐるかも知れんと云はれるモルガンが、我國に對して莫大な戰費を貸與せんとする氣配のある事である。このモルガン一族は、日本に對して昔から好意を持つてゐた。

彼の日露戰爭の際に、我國に軍費を貸與してくれたのは、現在のモルガンの親父であつて、當時まだ若い仲であつた當主であつて、彼は京都に滞在してその仕事の代理者をつとめてゐたが、その間に彼の有名な祇園のお雪と云ふ一名妓と割無き仲になつて「お雪モルガン」と云ふ流行唄にその艶名を流した程であつた。

英國ジウと米國ジウの相剋

その後、日露戦役は目出度く終了したが、何か面白からざるいきさつが彼と日本の〇〇との間に起きたらしく、彼は不満を抱いて日本を去つたが、お雪も同時に棄てられたやうである。所謂『明治の唐人お吉』の悲話が、今でも好事家の記憶に残ることゝなつた。

その後米國に於ては斷然としてハースト系新聞紙を背景として猛烈な排日運動が起り、日本人の歸化權は剝奪され、渡米は許されなくなつた。

聽て七十五日も過ぎて、渡米者志願者もなくなり問題は次第に解消されて行つた。海軍のいがかみ合ひも云はゞ米國の軍艦製造會社が種々の宣傳に花を咲かせて、軍擴熱を煽つて製艦をそゝのかせ、目的が達成してけろりとしたと云ふ形なのである。勿論その製艦業者達は猶太人である事に相違はないが、夫が彼のモルガン系であるか何うかは分らない。然し、とに角米國が猶太人の支配下にある事だけは確實な事實で、政權迄も左右出来る事は、英國以上である。今日米國にあ

る猶太人の勢力は、實に偉大なものである。

舊歐洲で散々金を絞つた猶太人は殖民と一緒に、南京蟲かだにのやうに船に乗込んで、この新領土に巢を構へたのである。凡てに於て自由米國は、黄色人種以外には、凡て手柔い處置を採る。猶太人亦此所にすつかり根を下してしまつた。そして、文明の後れてゐる。文化の未だ進まないこの國を急いで發展せしむ可く、殊に趣味教養の低くて粗野なのを淳化せしむ可く、猶太人協會では莫大なる金を捨て、世界一流の藝術家をこの國に紹介す可く日本の松竹會社の大谷にも匹敵す可き米國中の劇界トラスト王ベラスクの養子モリス・ゲストと云ふロシア系猶太人を主任として、全世界の藝術家を集めた。

モスクワの藝術座、佛國のサラペルナール、伊太利の聲樂家、曰く何、曰く何と云ふ一流の者が續々米國に渡つて來てその名義を披瀝した。日本の能なり歌舞伎劇なりを何故ゲストに買はせる事をしなかつたらうと、私は残念に思つてゐる次第である。到底算盤に合はない世界一流の藝人を、安い値段で鑑賞出來た事は仕合はせな事であつた、藝術の花が斯くて米國に立派に實つた許りではない。科學も亦歐洲を凌ぐやうになつた。

科學方面には石油王ロックフェラーと云ふ猶太人が、個人的財産を皆投げ出したのだ。野口英世博士の事業の事等は、餘りに世間に周知である。ナチスに追はれたアインスタイン・ハーバーその他の獨逸學者は皆米國に集まつた、富も亦近時は世界を凌ぐに至つた。而して此所にその代表者モルガンは、日本に對して、昔の通りにある好意を示さんとするのである。

これは一面に於て、餘りに世界的に横暴なる英國のロスチャイルド一家に對して、米國の猶太系が一種の挑戦を試みるものと見る事が出来る。英國のジウと米國のジウとの喧嘩とも見られる。更に又ロシアジウたるスターリンと、英國ジウと米國ジウの三すくみと見る事も出来る。ジウは凡てに於て團結和合するものかと思つてゐたら、何千年といふ長い間別れ／＼に住んでゐる内に、不思議にも郷土的色彩を異にして互に相争ふ現象を持つものらしい。一元の八種が今日相争ふのと同じ事なのだらう。

さて、中所で英國と米國の猶太人とが、相争ふ相貌を呈して來た事は面白い事である。而して米國のジウは、思想的に新らしく、人道的立場に立つてゐて、案外正直であることは凡ての點で證明出来る。これに反して英國のジウは老獪で横着で圖々しく陰險な事は天下に普く知れ渡つて

ある。一方淡泊で發展的であり——一方は慾深くて退嬰である。

今日の世界の進展を妨げつゝあるものは、英國ジウの影響と云へる。即ち今日の時勢と相容れない、世界の思想を毒しつゝある所の資本主義制度、個人主義、利己主義、權謀術數と云ふ物は英國ジウに依つて撒かれてゐる世界的毒瓦斯である。米國ジウが世界人道的立場からこれと戦はんとする事は面皮羊柄と云へやう。世界的に庶政一新されて、新文明が生れて人類が初めて幸福に入ると否とは、この戦争に一にかゝるものといふ事が出来やう。この意味でこれから以後の兩者の争ひを、十分興味ある目を以つて眺めてゐたと思ふ。

米の輿論を動かす英國ジウ

日本に頗る好意を示してゐた米國、殊に大統領ルースベルト氏も最近では露骨に日本の軍事行動に對して非難の意味を含めたやうな言辭を弄するやうになつた。がその理由は簡單である。米國民は輿論の方を政府の聲明や大統領の教書よりも重要視するのだ。その輿論は何處から生れる

か？ それは新聞から生れる。新聞は誰が作るか？ 資本家が金を出して、新聞記者が書くのだ。その資本家に新聞記者に、或勢力が及んでゐたら何うなるか？ 何うにもならない。即ち輿論は新聞紙で勝手に作り出される事になるのだ。大統領もそれには絶対敵はないのだ。輿論に依つて大統領の地位を保つてゐる情勢であるから、輿論に従ふより外はないのだ。これは、日本では絶対に見られない奇なる現象である。日本は新聞を取締る事は知つてゐるが、新聞を持つて輿論を作らうとも、又動かさうとも考へるものがない。今迄は大體その必要も無かつたが、今度といふ今度はその必要をしみつゝ考へて來たやうである。それはさておき、米國の輿論の前には、大統領も頭が擧がらないと云ふ所に、米國新聞紙の強味がある。その米國新聞が牙を揃へて日本に刃向つて來た。これは何うした譯か？

米國の十萬以上の各都市には必ず新聞が存在する。其所に筆を執る記者連は、最小限二名、最も多くて百五十名の者は、英國人であつて、決して米國人ではないのである。だから英國として何うしても米國を動かす必要のある場合には、此等在米英國人の記者に指令を發すると、彼等は直ちに英國の利益のなるやうな輿論を作り出すので、彼の歐洲大戰に米國を引すりこんだのもこ

の事情に依つてある。日支問題に就いても、初めは頗る冷靜に樂觀してゐた。支那との貿易が減つても日本との取引さへ滑かに行つてゐればよいし、又支那北部を日本の勢力に入れたなら、それから日本の諒解の下に其所へ米國品を入れ米國の投資を試みやうといふのであつた。所が俄然日本に對して反意を示すに至つた。蜂の巢を突いたやうに、日本軍の行動を非難し始めた。これ英國からの指令が飛んだのである。更に委しく見るなれば、新聞紙の資本關係に於て、英國系猶太人が多くはその資本主でもあるのだ。所で、米國系の猶太財閥は、英國系の夫とは違つた意味で米國新聞を押へてゐるのだが、そして英國系猶太人と米國系猶太人との間には思想感情で相争ふ所の物があるのだが、殊に支那に於ける商戰に於ては、相反目してゐるのだが、それが、英國側の勝を示したのは、この双方が妥協をつけたか勝負があつたのか、この間の消息は頗る不明である。

元來英國の猶太人と米國の猶太人とは、その趣きを大に異にしてゐる。米國の猶太人は、英國から渡つて來た者にしても、思想的に新しい物を持つてゐる。文化的な考へを持つてゐる。利益を狙ふ事も鋭からうが、然し社會事業殊に文化事業の爲には惜しげもなく金を投げ出す。彼の口

ツクフェーラーを見るが可い。如何に彼が世界の文化に偉大なる貢獻を爲したかを歐米の多くの演劇經營や興行は猶太人の手にあると云ふが、米國のベラスコ父子は、どれだけ米國に藝術要素を採入れたか分らない。彼等は支那に於ても亦種々の利益を擧げる事業を爲し、貿易を爲してゐるが、それと同時に支那に於ける社會事業も可なり大きなものがある。これに反して英國の猶太人は只唯利益を擧げることと専念してゐる。對手をどんなに虐けても、自分の利益を擧げさへすれば可いと云ふ最も利己的な、最も猶太人的なやり方をする。支那人に阿片を吸はして、支那人を亡ぼして自己の利益を占め様としたのは英國系の猶太人である。そして香港を取りその他各種の利權を占めてゐるのは似非人道的な事を行つて來たものである。その英國が日本の飛行機が非戦闘員を傷つける云々等とは云へた義理の者ではないのである。日本は正々堂々と支那の軍事施設のみを破壊することを明示するために、非常な危険犠牲を拂つて、又時間を豫告して迄白晝公々然と目的物に投彈をしてゐる。たゞこの明白な事實を無視する英國は己等が昔阿片戰爭をした時の心事を日本に強いやうとする愚かさを示すものである。

支那に躍る英國系ユダヤ

英國の猶太人共は、世界の商權我手にありと、高枕の夢をむさぼつてゐる間に、小僧扱ひにしてゐた日本は、次第に自力を養つて英國の商權と製造能力とを侵喰して來た。日本の商品は安くて良質である。世界の市場は次第に日本の手に歸して來た。米國もこれには驚いたが、然し廉價品は日本人に任せ、高級品を作る事をもつて自國の立場を作つた。英國は早くから支那全土は自國の繩張と思ひ込んでゐたのが、滿洲國の獨立に於て驚いてこれを妨害しやうとしたリットン卿の報告書以來であつた。無益な國際聯盟を日本が脱退したので英國は日本を憎み出した。と同時に中支南支に於ける自國の勢力だけは何所迄も確保せんとした。其所に利益の本據を置かうとした。それには日本の手が出せぬ軍工業を支那に起すことであつた。鐵道を敷くことであつた。然し、それは支那を開發し、支那人に利益を與へる爲でも何でもない。只自己の腹を肥すのが目的である。だから、然うした施設に對する報酬は莫大なものである。それは支那銀を持つて支拂は

れた。今日迄數億萬圓の銀は英國に持ち歸られた。リース・ロスが支那に永く滞在して、様々の工作をしたのはその爲である。支那の幣制を改めさせたのも彼である。その本據を上海において實に華々しく此の數年間を活躍した。

即ち上海に於ける土地建物の權利を持ち、瓦斯、電燈、水道、軌道の公共事業は、皆彼等英國系猶太人の手に收められてゐるので、そして絹糸の大工場をはじめ、軍器工場等皆英國系猶太人の施設になるものである。軍器を澤山に支那政府に買はしめる爲には戦争をしなければならぬし又戦争が今にでも起るか如き宣傳もしなければならん。其所で例に依り言論機關を其手に歸してしまつた。排日の氣勢を煽る事はお手の物となつた譯である。そして英國からはリース・ロスの外に、アーノルド・エヅラ、サツソン等の一流のちやき／＼の猶太人が乗込んで來て采配を振つたのである。そして、幣制の統一と共に紙幣發行權迄も彼等の手に奪つた。彼等の尻押しで爲替の安定を得た事は當然である。而して、純資本家的立場を作る爲にロシヤから南下し來る所の共產主義を蔣介石をして極力防禦せしめた。蔣介石は斯うした英國系猶太人の支援に依つて勢權を確保し頗る得意であつたのだが、彼の張學良に人質にされてから、彼は命の代償として共產主義

を認容せざるを得なくなつた。がそれと同時にスペイン問題でロシアと英國とは手を握つたので支那に於ても亦日本を共同の敵とする點に於て、或種の妥協はついたのである。

日本を苦しめる事は、日本を怒らす事であるから、日支戦争は十分に覺悟をしてゐたのだから上海方面の防備は實に到れり盡せりの秋である。が、然し、日本の海岸封鎖の場合を考慮して、猶太人等は支那内地の大陸横斷鐵道を計畫した。粵漢線がこれである。この鐵道は、支那海軍に封鎖されても南方ビルマ又は印度支那から必要な物資を支那中央部に取入れる事の出来る鐵道である。第一線は上海を起點として杭州、貴陽、長州、雲南、騰越等を経てビルマの八莫に至るもの、第二線は湖南の衡陽から柳州を経て印度支那の鎮南關に至るものである。勿論その沿線の豊富なる資源は、猶太人の懐ろに入るし、鐵道布設費は、支那政府が長期に亘つて支拂ふものである。この支那の心臓を養ふ大動脈とも見做す可き粵漢線を、わが飛行機が毎日破壊すれば英國側が毎日これを習復してゐると云ふのは面白い事である。この鐵道を全く止めてしまふ時、支那は血が止つて、眞に命を絶つものと云へよう。英國の猶太系と云ふ財閥が吸血鬼の如く支那に喰ひ入つて、支那を喰ひ破りつゝあるのを取除く事が、眞に支那を助ける事であり、東洋永遠の平和

を導くものである事を、吾人は十分に知つておく必要があるのである。

日本は何故商賣に失敗するか

東京銀座の、華々しく商賣をしてゐるみせが、大抵皆借金で首が廻らないと聞いたら、皆驚くに違ひない。更に日本中の金を大半握つてゐる大阪目貫きの通り心齋橋筋の通りは、銀座程の騒ぎではない、おてんとう様が上ると最う人が一杯で眞直ぐに歩く事は出来無い程に人で一杯だがさて、この通りをそんなにぞろ／＼歩いてゐる人達は店には殆ど客の入つたのを見た事はない。これは皆不思議に思つてゐるが、然し心齋橋通りの店は、凡て皆他に大きな事業をやつてゐるか、銀行に金がうなつてゐる人々が、道樂に、又は虚榮の爲に、損得を考へずに只やつてゐるのだから、これは儲からなくても平氣なのだが、東京銀座の店になると、これは借金がかさむと首を縊らなければならぬのだから悲惨だ。銀座で完全に儲かつてゐる家は、三四軒と云ふのが相場では他は借金してやつてゐると見て間違ひはないのだ。

これは華々しくやつてゐる、そして皆儲かつてゐるやうに見える銀座に於ての話だが東京の他の中以下の商店と云ふ物は、皆得はしてゐないのだ。得をしてゐる家は殊に少なくて、大抵皆やつこれがはつきり分る。この調べは少し古いが、今日よりも景氣のよい時にそれだから、今日ではこれ以上に悲惨なものと想像が出来るのである。それによると、東京市の物品販賣業、即ち卸小賣の人達十六萬五千餘戸の内、十五萬六千三百三十八戸を調べて見ると、此等が借金をしてゐる額高は、驚く勿れ、五億四千六十四萬三千五百六十八圓となつてゐる。

この借金は、無利子所か、皆高利で借りてゐるのだ。それを安く見積つて年八分としても四千三百三十五萬千四百八十五圓四十四錢と云ふ額になる。一口に四千三百萬圓と云ふが、これだけの金があれば、新議事堂を二千六百萬圓で建て、七百三十五萬圓餘があまる。オリムピックを四回位やれるし、戦争だつて、相當日数はやれる位の額である。此等を整理すること、東京中の商店は大部分消えてしまふことになる。

然らば、何故こんなに此等の店が損をしなければならないかと云ふとそれは數が多過ぎるから

である。何故、數が多くなるかと云ふと、此等卸小賣の店と云ふのが、案外小額の資本金でやるから、我も／＼もこの商賣に入り込む結果である。小資本でやれると云ふのは、これは營業者が多いからである。僅かの退職手當、貯金、又は田畑を賣つた紙幣束を持つて、一寸見ると、儲かりさうに見えるこの商賣に入る人が多いからである。

更に又此等の店は大資本のデパートに押されて客を皆取られるから損をするのである。これは日本だけの特色ではなく、實に世界を通じての大問題で、このデパートに投資して大儲けをするのは、例の猶太人にきまつてゐるのである。だから、獨逸では、ヒットラーが猶太人を慘殺し或は國外に放逐して、デパートを取締る事にしたのである。日本も同様、デパートは猶太人が經營してゐるのではないけれども、猶太人と同じやうな儲け方をするから、最近嚴重な取締りをもうけて、一般小賣商人を助ける事にした。東京市役所と市廳とは、五百萬圓を繰出して、この小商人の救済に當る事になつた程なのである。

東京市内だけでもデパートは、三十五軒であつて、その賣上金額は一ケ年に七千萬圓近くなつてゐるが、それに對して、小賣業者の方は、十幾萬軒が寄つてたかつて、僅かに四千三百萬と云

ふ数字になる。然も、この小賣業者の方は、この金額が皆利益になるのでなく、この一割だけが利益として生活費にくり入れられる。然もこの内でも、パン菓子類の店は、最も容易に小資本で開業出来るから、誰でもこれに手を出す、一ケ年の實上額は平均千九百圓餘で、その純益は一ケ年で七十三圓にしかない。一月に割ると、六圓計りにしかない。これでは、家の者が粥もすゝれない譯である。其所で夜逃げをするか、親子心中をするか、巧く行つて借金で命をつないで行く事になる。では、此等の小賣人に對して大小の銀行が借出しをするかと云ふと、銀行には金がだぶついてゐても、決して貸してはくれない。然る可き擔保物があるか、市内有名な保證人が二名以上無ければ一圓の金も貸さない。市や組合とても大體それと同様、其所で何うしても高利貸の御厄介にならざるを得なくなるのである。

所で、この高利貸と云ふ者は、東京市民に必要な計りでなく、日本中にも世界中にもなくてはならぬもので、それに依つて諸事業が運轉して行くものと云ふ事が出来る。但しこの商賣は普通人には出来ないもので、特別な人情性格の持主でないとやつて行けないと云ふのは薄弱なる抵當擔保物で貸し出しする爲、この不安危険性が多く、全然取れない場合があるから、利子を高くして

その埋め合はせをする。尙その爲之では不人情非人道的でなければ不可ない。其所で特別な神経感情の持主でないと出来ない。猶太人にはそれが平氣で出来るので、世界的の高利貸は猶太人と相場がきまつてゐる。日本でも高利貸をやる人は猶太人と共通な感情性格の持主である。

所で、この猶太人的人間の high loan が日本中で東京に一番必要なので、最も數多く入込んでゐるが、先づ千五百人と見られてゐる。これは、正式に登録されてゐるもので、この以外に無數にゐる。尙この正式の者は、全國的には五萬人居ると云ふ計算になつてゐる。此等の者が、日本中の商工業者の事業を助け、又それ等の人々から膏血を絞つてゐるのである。では、此の五萬人の高利貸がどの位の金を貸出してゐるか云ふと、一人平均一ヶ年に五萬圓と云ふ調査になつてゐる。

五萬人の高利貸が五萬圓宛貸出してゐると、合計二十五億萬圓で、その利子を極く安く月五分と見積つても、一ヶ月に二千五百萬圓、一ヶ年に十五億萬圓と云ふ額に上るのである。この利息を元金に繰り込んで行くと、實に莫大な額に上る。所で、日本中の全財産は千二百億萬圓であるから、高利貸に拂ふ利息金で、この全財産が今後八十ヶ年で皆高利貸の懷ろに取られるが、元金迄も皆取られるとしたら、そのなくなるのは更に一層早からう。で、今直ぐそれを拂はぬとして

も、日本中の財産は、どうせ皆高利貸に拂はねばならぬものと見なければならぬ。只勤勉なる日本人は、皆營々と働いて、この高利の利子なり元金なりの償却に骨を折るであらうから、日本の全財産が、彼等高利貸の餌食になると云ふ事は無からうがとに角高利貸と云ふ者程恐ろしい者はないと云つてよからう。而して又東京市民が最も多く高利貸の厄介になつてゐるのである。大臣も官吏も華族も皆その魔手に翻弄されて、それが爲に、その地位を奪ひ去られる者の數は夥しいものである。然るに高利貸は、自分等の手で、どれだけの人を救つてゐるか分らないと云つて豪語してゐると云ふ有様である。故に、此等の高利貸連が、英國の猶太人の如く、政治的野心を抱いたならば、どんな恐ろしい結果が生れるやも知れない。これが猶太人根性といふ奴を、わが國に例證したのであるが、さて英國系の猶太人はこの事變でどんなにその本性を發揮して居るかをせんさくして見よう。

事變のドサクサに英國のボロ儲け

アメリカといふ國は、往年の歐洲大戰を轉機としてガラツと變つた國だ、その代表的な現はれは、大戰前は世界第一の借金國であつたが、戰後乾坤一轉して世界第一の貸金國になつた、嘘のようだがほんとだ。

あれから約二十年！ 世界の金が悉く引きつけられて、今世界中の金の八割はアメリカにある。そしてそれまでは世界の金融中心市場はロンドンであつたのがニューヨークになつた。人間の最も欲しがる金が戦争のために不思議な力で一ヶ所に集まる。

轉んでも只起きぬと言はれて居る英吉利が、それを知らぬ譯はない、日本と支那の今度の戦争に、一番早くそこへ目をつけたのはかれ英國である。

北支の一戰に、血腥さい戦雲を見た彼れアングロサクソンは、今ぞマイダスの榮譽を夢見て、算盤片手に全支那へ繰り出した、儲けるのは今だ、日本の放送する「建國の大理想」なんかに耳

を藉する暇はない。屬國アメリカの故智に倣ひ、世界の富をこの一戦に集めようと、われ／＼日本人に想像すれば、「火事泥」の心理を如實に發起した、そして實行した、英國——アレグロサダン——猶太人、この手合の支那事變の裏に活躍する儲け振りは、むしろ凄味を帯びて居る。持てる國、即ち天然資源なり領土なり財産なりを必要以上に持つてゐる國の代表者は何と云つても英國である。土地の如きは全世界の陸地の二分の一を領してゐるが、一平方哩にたつた一人と云ふ稀薄な人口を持つ領地すらあるのである。で、アメリカ大統領の秘書だつたハウス大佐は斯る有り餘る物を持つ國は、日・獨・伊のやうな天然資源に恵まれないで、然も人口の激増する國々に對して、餘分の物を分ち與へるのが當然だと叫んた。それ以來、米國の學者政治家にはこの意見に従つて、英國に對して分與す可き事を旺んに説いてゐる。日支戦に入つて殊にやかましくこの問題を稱へ出した。

英國の政客にもこの意見に賛同する者があつて、英國の議會で屢々この問題を論議して、政府當局は、分與の意志ありや否やと詰問したりしてゐる。これに對してイーデン外相は、英國政府に於ては斯る意志の毛頭無い事を明確に斷言してゐる。即ち、英國は有り餘る上に更に外國から

種々の利益を挙げやうと考へてゐるのだ。即ち、世間が何と云はうが、どんなに苦しむ國があつても、かまはず何處迄も利益を取つて行かうとするのだ。與へる所か取らうとするのだ。金のあつる者程心が汚くなると云はれる通り、英國は益々欲深くなりつゝある。

その良き證據は、スペインの内亂に對し、又支那に對してその慾心を充分満足させてゐる事である。スペイン政府軍に對して武器の供給を充分に行ふと同時に、スペイン國內に於ける利權を充分に確保しやうとしてゐるが、支那に對しても同様の事をしてゐる。即ち、兵器彈藥其他支那の必要とする物を、自國船でどしどし供給してゐるが、その報酬としては、現金でなく鐵道敷設權、工場設立權、鑛山採掘權等である。尙支那をけしかけて日本と戰はしたと云ふ事も云へるのである。

とに角、老獪にして裏面工作と外交戰術の巧みな事は驚く許りで、自己が利益を得んとする場合には、必ず他國を利用して、自分は君子面をし、世話役の顔付をして、そして、利益を皆さらつて行くのが今迄の常習であつた。火事泥に妙を得た事は、世界第一である。斯して、決して自分分は矢面に立つて責任の地位には當らぬのである。この狡猾振りに、列國共あきれ返つてゐる

が、然し何と云つても世界一の強國だから、どの國も泣き寝入りしてゐるのである。我國の如きは、全く怖英病に罹つてゐると云つてもいゝ位、この國の云ふ事爲す事を唯々諸々と承はつてゐたのが今迄の情態であつた。而して、我國の或種の上層部では、然うする事が當然の義務と心得る許りか、英國に阿諛する事すら日本臣民としては當然の事と思つてゐるやうだ。

尙英國が、自國の安泰と利益の増大を企圖する結果、世界各國を縦横に操つてその目的を達成せしめんとしてゐる形勢がある。即ち彼は自分の持つてゐる物を人に與へて、人の不足を補はせると云ふ事をしない代りに、世界の各國を平等の力にして、互に軋轢の起きないやうにと考へてゐるやうである。即ち歐洲戰後佛國が非常に優勢な形を示した。それを押へる爲に、彼は獨逸の肩を持つた。敗戰國獨逸を助けて、その勢力を速かに挽回せしめた。と同時に、伊太利を助けてこれを強力ならしめて、佛獨に當らしめんとしたが、これは藥が利き過ぎて、エチオピアを取つてしまつた。そして、獨逸と握手してしまつた。エチオピア攻略には武力をもつて抗するかと思はれたが、金持ち喧嘩せずで、殊に自分の懷ろが痛むのでないから、自由にエチオピアを領有せしめた。

然し、英國は、何うしても伊太利を抑壓する必要がある。獨逸はその味方となり、佛國はその力が無いと見たので、彼は早速ロシアを説きつけた。ロシアは南方に何うしても不凍港を必要とするのだ。支那にそれを需めても日本が頑張つてゐるから、最早大連を取戻す事は出来ない。ペルシア方面か地中海かである。ペルシアに出口を求められては印度が危ふくなるから、英國は急いで地中海にその出口を見出してやつたのだ。蘇聯ロシアは大悦びで、黒海から地中海へと船を進出させた。而して、それは當然獨逸と伊太利とに對抗する事になる。殊に地中海は我物と思つてゐる伊太利を怒らせる事は一通りでなく、所謂海賊潜水艦の暴れ廻るのも然うした原因からである事を充分考へに入れる必要がある。

スペイン國內及び地中海を中心として露伊獨伊が互に争鬭をくり返してゐるのは、皆英國の差金と云ふことが出来る。此等四個國が戦ひに勞れれば勞れる程、英國は儲かるし、安全でもあるのである。而して、東洋に對しては何うかと云ふと、これ亦日本と云ふ強國を押へつける必要に迫られてゐる。日本が滿洲を勢力範圍に入れて支那を壓迫してゐる事は、英國にとりて非常な苦痛であり損失になるのである。即ち、支那は英國にとつて最大のお得意様である。それが日本が

のさばると、その商取引は當然日本に獨占される。現に支那貿易、南洋貿易は、英國を驅逐して漸次日本の物になりつゝあつた。

英國の立場上何うしても日本を支那の土地から追ひ拂つて、商業權その他凡ゆる支那に於ける利權を英國が收めねばならんと覺悟をしたのである。有り餘る物を日本へ分與する所か、貧乏する日本をもつと苦しめやうとするのである。南洋方面に日本が發展せんとするの迄も、極力防止せんとしてゐるのである。

斯うした時に日支事變は勃發したのである。日本が好き好んで支那に兵を出したのでない事は明瞭である。已むにやまれず膺懲の師を出した事は瞭然である。而して、駐支大使は旅中不慮の災厄に遭つた。それを日本の責任であるとして、先頃旺んに喰つて惡つてゐた。

更に英國は地中海に於けると同様に、蘇聯ロシアを焚きつけて、日本に掛らせやうとしてゐる。支那を蘇聯は援助して、國共合作を完成し、軍事密約を締結して旺んに武器を供給して居る。即ち支那の敗戦を蘇聯に依つて挽回しやうとたくらんでゐると見てよからう。蘇聯と日本とを戦はせて、その間に支那に於て漁夫の利をせしめんと考へてゐるのが英國だ。火事泥を稼がうとして

ゐる。實に油斷も隙もあつたものでない。彼のシヤム國は殆んど完全に我國の勢力範圍に入つてゐたのであるが、支那と兵を交へてゐる隙に、昔の勢力を挽回したやうである。日本はこの國で頗る壓迫を受け出したやうである。彼はこの方面で、その毒牙を露骨に示し出した。

元來、蘇聯の共產主義と英國の帝國主義、資本主義とは氷炭相容れない物で、今日迄は極力蘇聯を抑壓し、その發展を阻止せんとしてゐた。日本が獨逸と提携したのも、英國が陰に陽に援助をしたと云はれるのは、彼が蘇聯を壓迫する必要上から當然の事と云へやうと思ふ。斯程迄に忌み嫌つてゐた蘇聯と今度は手の裏を返すやうに手を握り合つて、そして、日本を壓迫せんとしてゐる。彼は利益の前には主義も主張も何もないので、全く性根の腐つた女郎か守錢奴的行動である。而して、蘇聯が愈々公然とのさばり出したら、それを如何に料理しやうとするか？ 獨逸を突くか、日本をけしかけるかの何れかであるであらう。

斯うして見ると、英國に操られて戦争をしたり、他國と争つたりする者が、一番馬鹿を見る譯である。スペインや支那許りではない、何處の國もよく／＼考慮する必要がある。殊に英國を多年崇拜してゐるやうな人間の多くゐる我國では、特に注意をする必要がある。今後どんなことで

英國に背負ひ投げを喰はされ、突倒されるか分らないのである。然も彼は戦ふやうな態度を示して、實は決して戦ふ事の出来ぬ状態に置かれてゐるのだから、彼を恐れる必要は絶対に無いのである。彼に對しては、少しも遠慮する所なく、當方の主張を何處迄も押し通して彼をへこます事を考へなくてはならない。恐る可く否眞に憎む可きは彼れ英國である。

更に英國の我國に對する態度方針等を、此の際充分に検討する必要がある。と云ふのは、今事變勃發以來彼の態度は、以前の友誼的態度から急に非友誼的となり、更に一轉して惡意的態度を示すに至つたが、最近に於ては、既に露骨に故意に日本の反感を求め、日本に挑戰的態度をとるに至つた事である。これを事實に就いて云ふならば、事變突發間もない七月十二日にロンドンに於てイーデン外相は、吉田駐英大使を訪づれて、事件の不擴大を要望した。更にその十五日には駐支ヒューゲセン大使は我が日高參事官に對して同様の希望を述べた。

この時迄の英國の我に對する態度は、別に惡意を示してはゐない。戰爭の不擴大を要求するは自己の權益に傷けないと思ふ心と、平和を愛する意圖からと見られるからである。所がその翌七月十六日に至ると、俄然英國の態度は變つて來た。即ち九ヶ國條約調印國全部に覺書を交付して

日本に對する共同干涉の誘出に躍起となり出した。そして、七月二十七日の英國議會に於て、イ
ーデン外相は、米佛露を誘つて、日本に干涉する事を相談した。八月十四日の議會には、支那事
變の重要性を説いて、對日方針に就いて、米佛政府と協議した旨の報告を爲し、この頃から次第
に、日本を抑壓し出した。

所で、英國は支那を極力援助してゐたのだが、支那軍が次第に日本軍に破られて、英國の期待
は次第に裏切られて行つた。この敗戦は頗る彼英國をいらだかせたと見えて、それに依つて、日
本に對する彼の態度は益々露骨に我に當り出した。八月二十六日に於ける我海軍の沿岸封鎖に對
しては、これを不法なりとして日本に難詰を喰はせたが、この日運悪くもヒューゲツセン大使は
南京から上海に亂暴極まる戦線突破を企て、爲に飛行機からの射撃に逢ふや、直ちにその飛行機
は日本軍の物であるとして、駐日ドイツ代理大使をして無理極まる通牒を發せしめて來た。

又更にヒューゲツセン氏代理として支那に乘込んで來たハウ代理大使は、九月十三日に上海に
到着すると同時に、戦線通過に就いては日本に通告の必要は全然無い。日本がその事を知る必要
があるなら新聞の消息を見れば分る筈だと不遜極まる言を述べて、そして、南京入りする前に、

戦線視察にと出かけた。一方シンガポールには軍隊を増員し、香港にも海軍を待機せしめて旺んな示威運動を始めた。我國が多年鋭意努力して築き上げた商權を驅逐する事を企てた事は明瞭である。明治三十五年に日本と友誼的に同盟を結んだ好意は、今何處に在りやと云ひたくなる。だが、元來この日英同盟なる物も、元を洗つて見れば、英國は自分の利益の爲めに取結んだのであつた。

即ち屬領印度を始め極東に所有する多くの權益を擁護する爲と、南下し來た露國の勢力を日本に依つて防衛せんと考へたのであつた。だから、日本をして露國を破らしめ、又歐洲大戰には日本を利用して獨逸を苦しめた。然し日本が次第に強大となるやこれを壓へる必要ありと思つて、大正十年華府會議を機として、二十年來の日英同盟を破棄して米國の意を迎へる事に努力をした。そして、日本の海陸軍に制限を加へる事を劃策し出した。更に彼の滿洲事變以後は、支那にすつかり取入つて、日本を支那から驅逐しやうと企むに至つたのだ。だが、最早米國は英國の餘りに現金主義、巧利主義なのに愛想をつかして隔らなくなつた。だから、英國は一人でやきもきしてゐる有様である。

尙彼は北支方面は全く日本の勢力範圍に入り、中支に於ても何うにも手の下しやうが無かつたので、彼は南支を中心として其處に英國の權益の中心を置く事にしたと稱せられてゐるが、とに角彼の出やうこそは、支那を、蘇聯を、その他凡ゆる國々に大なる影響を及ぼし夫等が悉く皆直接日本の利害と安危とに關するのだから、寸時も油斷は出來ないのである。彼も亦今回の處置を一步過れば、印度を初めアフガニスタン、ペルシヤその他回教徒達の多く住む近き東洋の諸地方に大動搖を來たすので、殊に必死の有様を示してゐる事は、一面笑止でもあり罪の報ひでもある。

昭和十二年十一月十日 印刷
昭和十二年十一月十三日 發行

【支那を毒するユダヤ系英國人】

定價 十 錢（送料三錢）

不 許 複 製

（全國主要轉
賣店・書店に
て發賣）

著 者 仲 木 貞 一

發行人 東京市芝區新橋四ノ四六 鈴木 徹 郎

印刷所 東京市芝區新橋三ノ二〇 更生 社 印刷 所

發行所 東京市芝區新橋四ノ四六 東京朝野新聞出版部

發賣所 東京市芝區新橋四ノ四六 昭 和 書 房

大 東京鐵道局公認（鐵道保獎會・鐵道公濟會）
取 東京（京阪神）新正堂書店（名古屋）南進堂書店
次（宇都宮）淺野屋書店（靜岡）吉見書店

昭 和 書 房 發 賣 書 目

(錢三料發 錢十册各價定)

——りあに店書名有・店賣驛國全◇
◇いさ下み込申御接直は際のれ切り賣

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
龜岡 豊二著	山田 文吾著	前田 義雄著	難波 篁人著	陸軍政務次官 加藤久米四郎著	前田 義雄著	仲木 貞一著	龜岡 豊二著	蘆田 均著	前田 義雄著
赤化しつゝ亡び行く支那	戰場に猛る 支 那 女	戦火遂にロシヤに飛ぶか	我が戦時經濟はどこへ行く	戦線を訪ねて國民に懇ふ	どこまで行くか <small>支事變(白鳥公使の 戰局觀)</small>	軍事小説 北支に躍るスパイ戦	血迷へる支那遂に墓穴を掘るか	戦争はいつ始まるか	武人・時局を語る提督山本英輔

昭 和 書 房 發 賣 書 目

(錢三料送 錢十册各價定)

——りあに店書名有・店賣驛國全◇
◇いさ下込申御接直は際のれ切り賣

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
	仲木 貞一著	帝國軍事協會編	仲木 貞一作	龜島 敏子作	帝國軍事協會編	船田 中著	前田 義雄著	仲木 貞一作	鳥山 景三著
	ユダヤ系英國人	敵は本能寺	蒙古に跳る我義勇軍	軍事小説 北支の爆撃	毒蛇のような支那兵	問題はこれからだ	事變と八將軍	軍事秘劇 戀の銀翼	極東の陰謀戰

龜岡 豊二 著

定價 十錢（送三錢）

赤化しつゝ、

亡び行く支那

赤一色に塗り潰された執拗な支那である。恐るべきコミンテルンに操縦されてゐる彼等である。そして赤魔に踊らされつゝ亡び行く支那の實相を描く

（賣り場に品切れの節は直接
に當書房に御申込下さい。）

昭和 書房

東京・芝・新橋 四ノ四六
振替東京 一五六九四七

前田義雄著

定價十錢（送三錢）

事變と八將軍

戰時に於ては、國を擧げて軍部に依存するのが國民常識だ、それに関聯して、その軍部の中樞をなす將星の横顔を知らんとする意欲も起る、そしてそれを識ることによつて國民の決意も一層深められ銃後の準備に萬全を期することが出來よう。本書は著者が親しく八大將軍の往訪して輓近の心境を打診せるもの、皇軍の根據の磐石を測るに足るであらう。

（賣り場に品切れの節は直接
當書房に御申込下さい。）

昭和書房

東京・芝・新橋四ノ四六
振替東京一五六九四七